

〈贈る言葉〉

Teele 先生を送る

鈴木 健司

Nicholas John Teele 先生が、特別任用教授の定年まで1年を残して退職されることを穏やかな口調で語られたのは、2011年の初夏のことでした。ご自分を律して、考え抜いて下された決断でした。「余人を以て代え難い」という擦り切れた表現は、本当はこういう時のためにあったのだな、と思いつながら、私は先生の言葉を聞いていました。

Teele 先生は、1988年の入社以来、19年間を英語英文学科の教員として、6年間を新設の国際教養学科の教員として過ごされました。その間、英語ネイティブスピーカー教員としての役割に加えて、日本人教員と同様に、多くの役職を担ってこられました。教務主任、国際交流センター所長、英語英文学科主任を歴任され、2007年からの3年間は、第12代学長も務められました。

子どもの頃から日本で生活され、学術的に日本への造詣が深い Teele 先生については、誰かが漢字を誤って読んだのをさりげなく訂正されたとか、誰も読めない古い掛軸の文字を一人すら読むことができたとかという類いの実話が、面白おかしく伝えられていました。会議でも世間話でも、日本人教職員と日常的に日本語で朗らかにやりとりされていて、言語修得の苦労など微塵も感じられませんでした。そんな先生が、思いがけず学長となられることが決まった際に、大学行政に使われるような日本語を書くことができないから自分には無理だ、と仰っていたのは、謙遜ではなく本心だったのでしょう。にこやかな先生が言語と向き合う姿勢の内面の厳しさを垣間見る思いがしたものです。

比較文学・比較文化の研究者である Teele 先生は、全学共通の科目や国際教養学科の科目で、日本に関することを数多く取り上げてこられました。

アメリカ人の目で日本文学・日本文化に研究テーマを見出し、授業で語られる先生の姿は、日本人として北米文化の研究と教育に携わる私自身にとっては常に、学問として異文化に向き合うことの意味を考えさせられる鏡のような存在でした。英語・英米文学・英米文化を専門とする日本人教員の多くにとっても、それは同じだったのではないのでしょうか。

その一方、英語英文学科のアメリカ人教員という立場にあって、Teele 先生が、授業においてはアメリカを扱うことを求められる機会も少なくなかったことは、言うまでもありません。単に自国の表層を論じるとすれば容易なことであったでしょうが、先生は努めてご専門の文学研究・文化研究に裏付けられた形で、アメリカに関する開講テーマを設定されました。当然といえば当然のことですが、安易に流れないそのようなやり方を示されたことが、当時の英文学科のカリキュラムの中で、文化という新しいジャンルに確固たる方向と内容を与えてきたのであり、そのような姿勢に私は先生の矜持を感じます。

学長としての Teele 先生は、学部学科の再編が熱く論じられる大変な時代に、良心と信念を持って大学を導いてられました。そんな中で、学内で圧倒的なプレゼンスを誇っていた過去とは異なる状況を迎えた英語英文学科に、ともすれば逆風が吹くのを遮るように、先生がかつての所属学科をきわめて慎重な言葉で公正に語られる場に、何度も遭遇したことを思い出します。

Teele 先生は、同志社女子大学の国際交流の推進に関心と熱意を持っておられました。海外協定大学からの来客に直々に対応されることも多かったのですが、ご多忙のため学長在任中に海外を訪問される機会はほとんど持っていただけませんでした。けれども、研究者として、教育者として、学長として、さまざまな状況下で異なる文化の狭間に立って架け橋の役割を果たしてこられた先生ご自身の存在こそが、多くの学生や教職員にとって、実は建学理念である国際主義を最も身近に体現していた、と言えるのではないのでしょうか。

京田辺キャンパスの程近くにお住まいの Teele 先生は、国際教養学科の事情で、この春学期も嘱託講師として大学に来てくださっています。1月の最終講義で“Sacred Places”について話された先生に、もうそろそろゆっくりご自分の時間を楽しんでいただかなくては、と感謝を捧げる一方で、くつろいでお話できる今の時がずっと続けばよいのに、と思わずにはられません。